

平成 30 年 3 月末日

教育学部長 殿

教育学部における教育方法としてのアクティブ・ラーニングの現状と課題

教育学部 FD 委員会委員長

福田 亘博

文部科学省は、平成 26 年度から、国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、教育再生実行会議等で示された新たな方向性に合致した先進的な取組を実施する大学を支援することを目的として「大学教育再生加速プログラム」を開始した。このプログラムは、平成 26 年度を初年度として公募され、本学国際教養学部が平成 6 年度創立以来実践しているアクティブ・ラーニングについて、それらの体系化し、その成果を測定・評価することを目的として申請・採択された。申請は、国公私立大学等から実に 250 件から 46 件採択された。本学の申請は「テーマ I: アクティブ・ラーニング」と「テーマ II: 学習の可視化」の複合型で採択された。

本学では、AP 事業に採択後、国際教養学部を中心にテーマ I & II について研究が展開されてきたが、教育学部でも教科教育法などの実践的科目において、シラバスに記載したアクティブ・ラーニングを適用・活用してきた。今年度、これらの活用結果について、2018 (平成 30) 年度に調査・報告書として取りまとめ、ここに公表したい。なお、アクティブ・ラーニングについて、本学 HP 上に定義を公表しているので、参照頂きたい

([https://www.mic.ac.jp/files/uploads/EDUsyllabus\\_guideline.pdf](https://www.mic.ac.jp/files/uploads/EDUsyllabus_guideline.pdf))。

今年度は、教育学部では、開講している専任教員及び非常勤講師が担当しているすべて講義科目等について、学生による授業評価が高得点であったことから、これらの理由として、何が良かったのかを検討した。その結果、本学部で学生に知識・技能の定着・理解を促すために採用しているアクティブ・ラーニングによる教育法の可能性が考えられたため、専任教員について調査し、報告書として取りまとめた。すなわち、アクティブ・ラーニングの現状について、2018 (平成30) 年度前期及び後期に教育学部専任教員が担当する講義・演習を対象にアンケート調査を実施し、その結果について考察した。

I. 前期アンケート調査の概要

1. 対象: 教育学部の専任教員
2. 有効回答: 合計 9 名 (講義 17 科目、演習 27 科目)
3. 質問事項: AL の授業活動の利用頻度について、下記の選択肢に○をつけて回答した。  
【選択肢: 該当なし、使わない、時々使う、よく使う、非常によく使う】

## II. 調査の内容

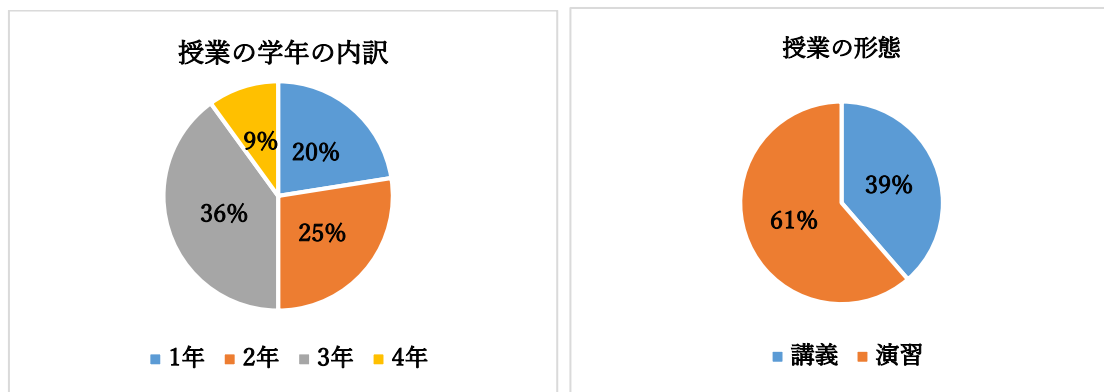
### 1. 使用頻度を調査した AL のリスト

授業内	①グループワーク
	②ディベート
	③フィールドワーク
	④プレゼンテーション
	⑤ロールプレイ
	⑥模擬授業・模擬保育
	⑦実験
	⑧小テスト
	⑨質疑応答
	⑩振返り(後期に加える)
	⑪作品制作(後期に加える)
授業外	① 課題(レポート以外)
	②個別レポート
	③グループレポート

※⑩及び⑪は、前期の調査の追加の手法の欄に記載があったので、今回から追加した。  
⑪は、図画工作のような作品制作を想定していたが、指導案という補足があったので、参考データとする。

### 2. 前期の調査結果

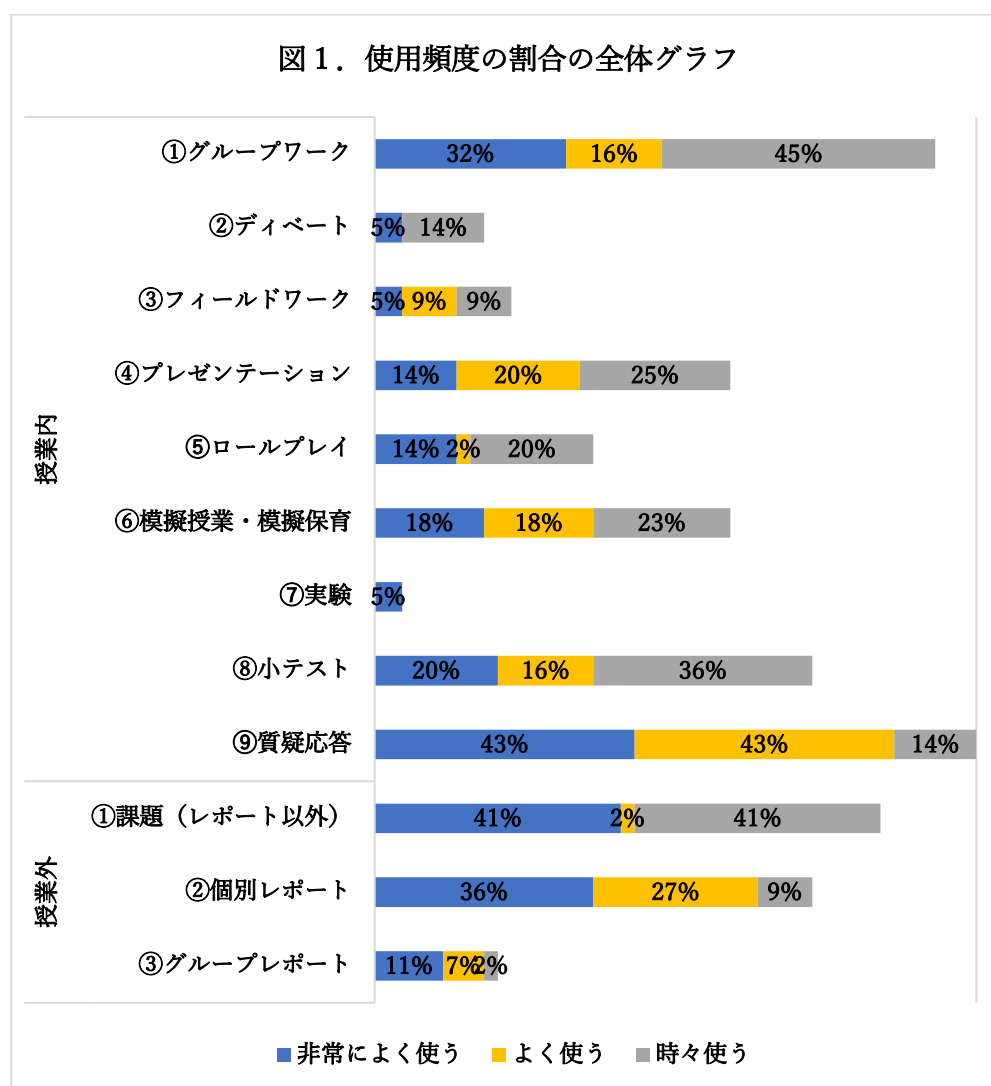
#### 1) 授業の属性(25 授業・演習科目)



#### 2) 前期におけるアクティブ・ラーニングのアンケート調査結果

##### ○全体的な使用頻度

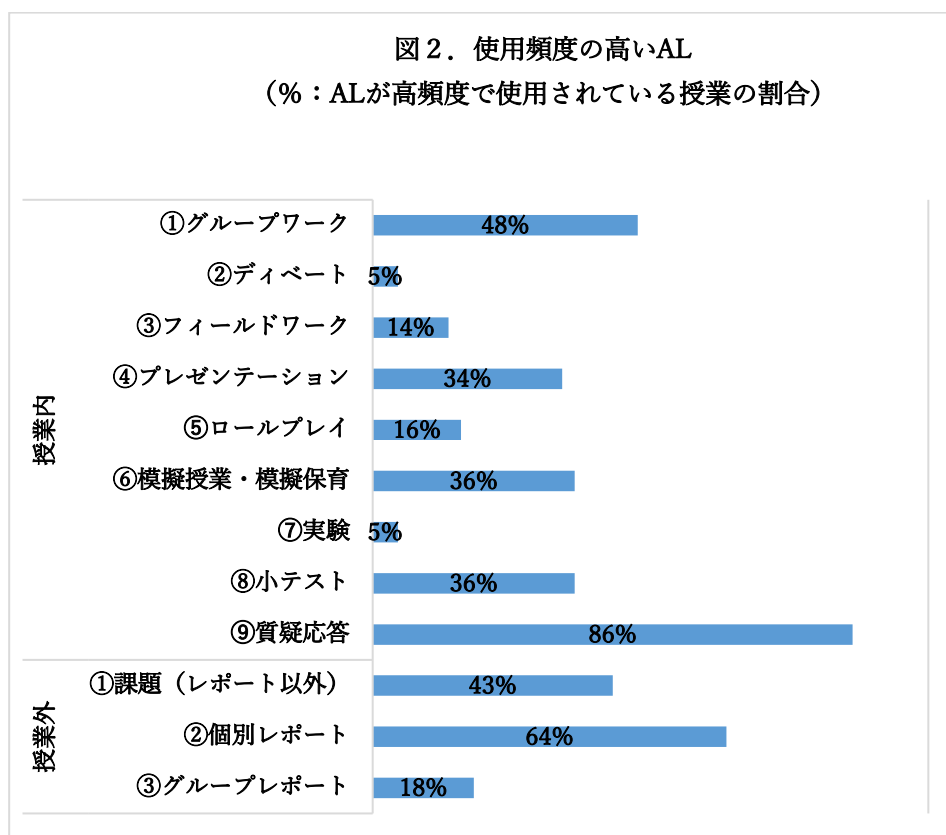
図1にアクティブ・ラーニングの使用頻度の割合を示した。%は、回答を得た44の授業数を分母とした授業の割合で表記した。また、使用されているアクティブ・ラーニングの全体像をより明確にするため、「該当なし」「使用しない」を削除し、「非常に良く使う」、「良く使う」、「時々使う」の3つで表記した。その結果、全体的に、使用されている授業内のアクティブ・ラーニングの活動で最も高い割合で使われていたのは、「①グループワーク」、「⑧小テスト」、「⑨質疑応答」であった。ついて、「④プレゼンテーション」や「⑥模擬授業・模擬保育」が比較的高い頻度で使用されていることがわかった。「⑦実験」は理科の授業のみで使用されていた。授業外では、「①レポート以外の課題」や「②個別レポート」は頻繁に使用されていた。一方、「③グループレポート」の使用頻度は低い割合で使用されていた。



○使用頻度の高いアクティブ・ラーニングについて

使用頻度の高いアクティブ・ラーニングを特定するために「良く使う」「非常に良く使う」を抽出した結果、図2に示すように、授業内で質疑応答(授業で高頻度に活用)(86%)、グループワーク(48%)、小テスト(36%)、模擬授業・模擬保育(36%)、プレゼンテーション(34%)が使用されて

いた。一方、授業外におけるアクティブ・ラーニングは個別レポート(64%)、レポート以外の課題(43%)であった。

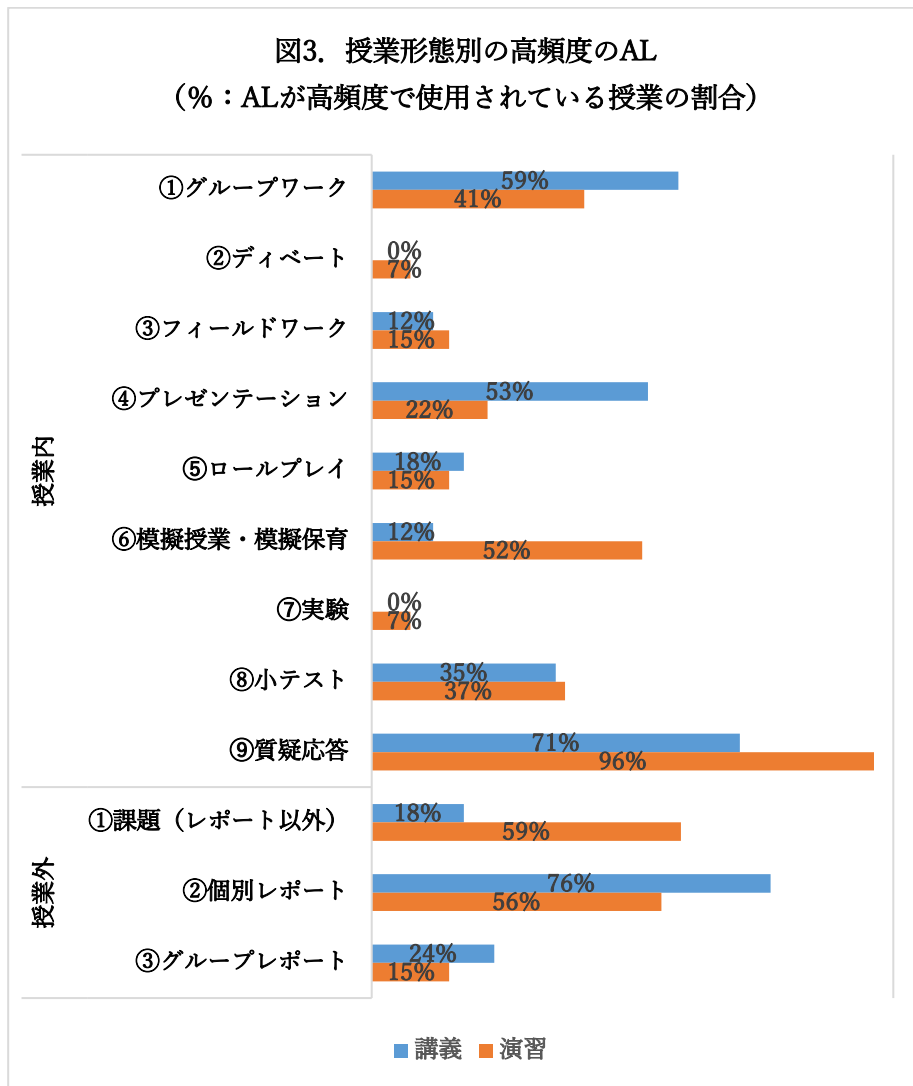


○授業形態別における使用頻度について

授業形態(講義・演習)別におけるアクティブ・ラーニングの使用頻度の相違について図3にその解析を示した。その結果、以下の整理することができた。

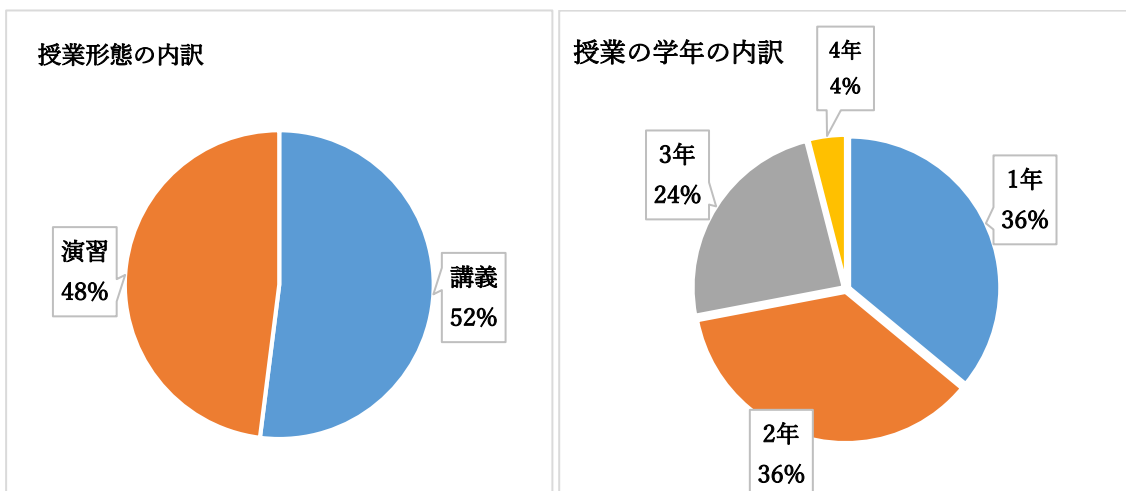
- ・グループワークは演習でも高頻度で使用されるが、講義の授業でも多く取り入れられていた。
- ・プレゼンテーションも講義の授業でより多く取り入れられていた。
- ・小テストは、講義の授業のみならず演習でも比較的多く使用されていた。
- ・質疑応答は、講義の授業でも頻繁に使用されていた。
- ・講義、演習の授業でともに、個別のレポートがそれぞれの内容を理解しているかを確認するために非常によく使用されていた。
- ・レポート以外の課題は、演習の授業でより高頻度で取り入れられていた。

図3. 授業形態別の高頻度のAL  
 (% : ALが高頻度で使用されている授業の割合)



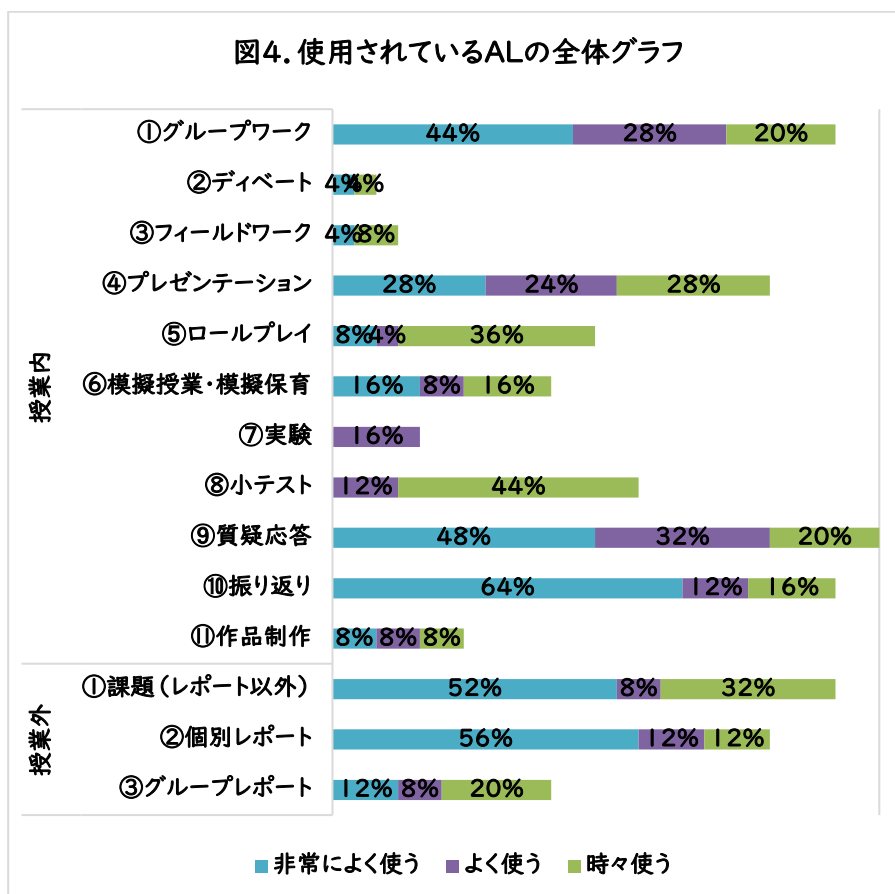
3. 後期におけるアクティブ・ラーニングのアンケート調査結果

1) 講義の属性



○使用されているアクティブ・ラーニングの使用頻度

全体的に、使用されている授業内のアクティブ・ラーニング活動は「①グループワーク」、④プレゼンテーション」、「⑨質疑応答」、「⑩振り返り」であった。また、「⑤ロールプレイ」「⑧小テスト」も比較的良好に使用されていることがわかった。「②ディベート」「③フィールドワーク」は、あまり使用されていないということがわかった。一方、授業外では、「①レポート以外の課題」や「②個別レポート」は頻繁に使用されており、また「③グループレポート」も適度に使用されていた。



○特に使用頻度の高いアクティブ・ラーニング(「よく使う」「非常によく使う」)

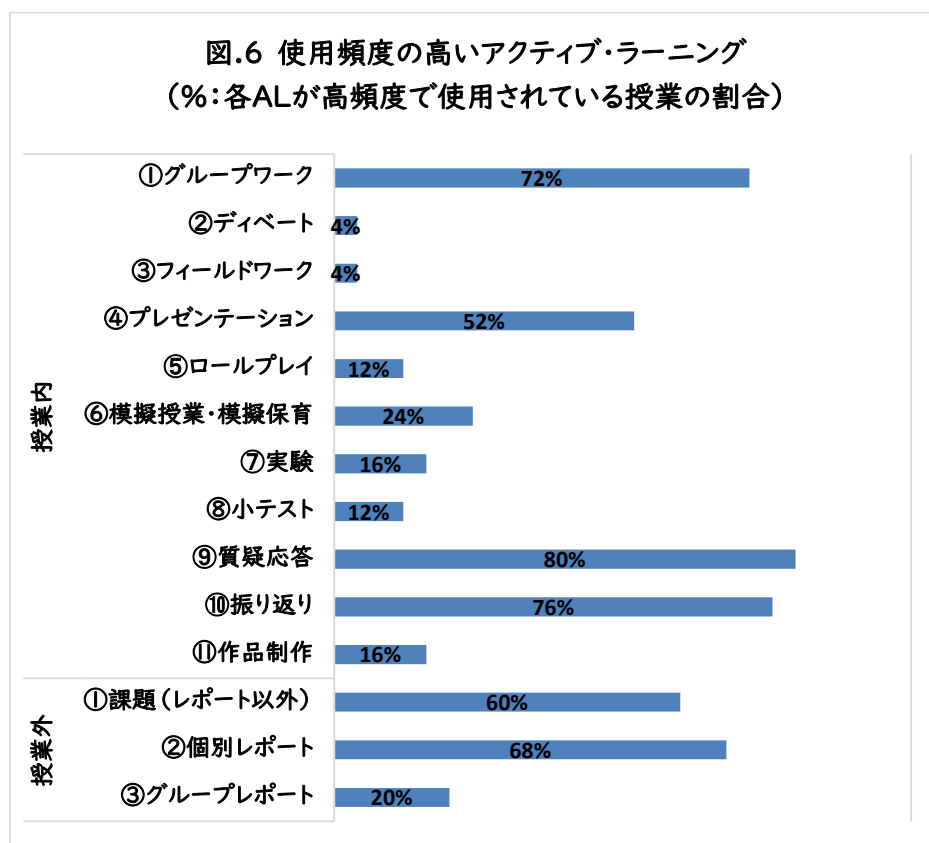
特に、頻繁に使用されているアクティブ・ラーニングを特定するため、(該当なし、使用しない、時々使う、よく使う、非常によく使う)の回答のうち、「よく使う」、「非常によく使う」を「使用頻度の高いグループ」とした。結果は図5のグラフとなった。

授業内の高頻度のアクティブ・ラーニング

- ◆ ⑨質疑応答(80%の授業で高頻度で活用されている)
- ◆ ⑩振り返り(76%)
- ◆ ①グループワーク(72%)
- ◆ ④プレゼンテーション(52%)

授業外の高頻度のアクティブ・ラーニング

- ◆ 個別レポート(68%)
- ◆ レポート以外の課題(60%)



### ○授業形態での使用頻度の相違

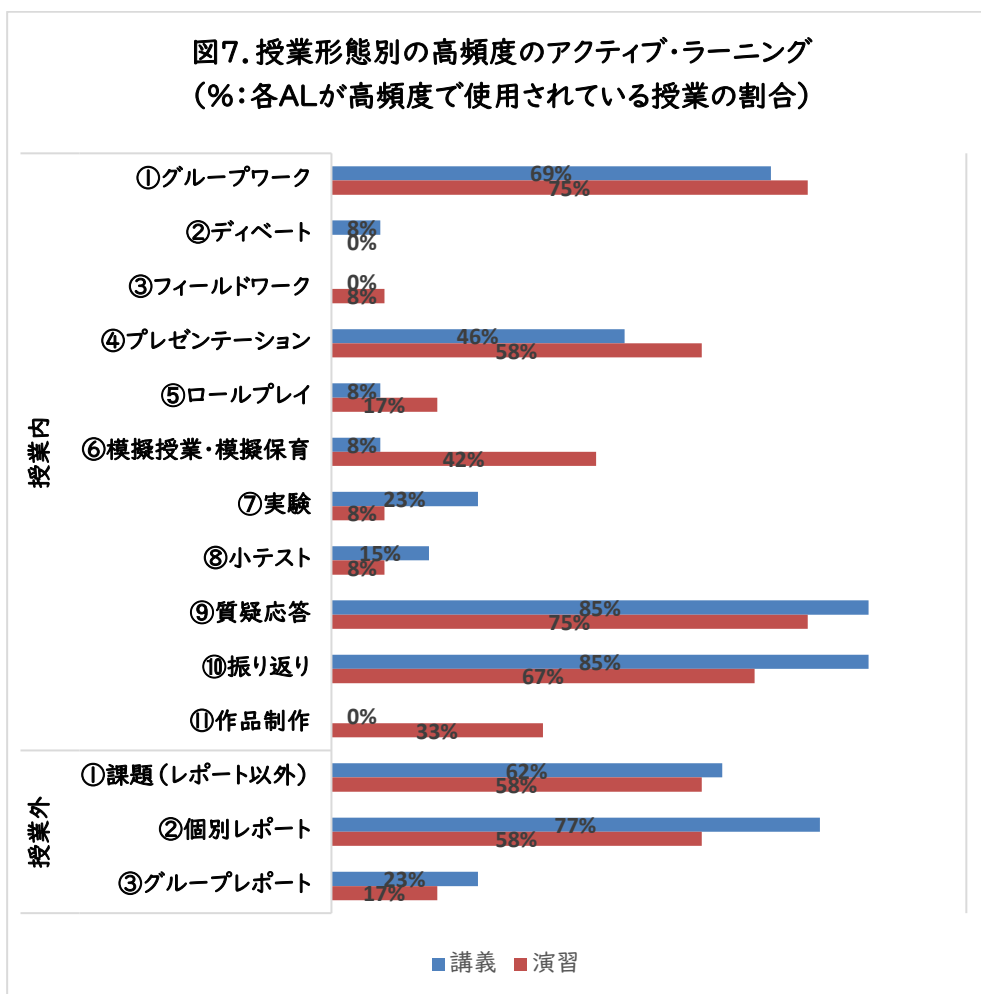
授業形態(講義/演習)別に高頻度で活用(「よく使う」もしくは「非常によく使う」)されているアクティブ・ラーニングは図7に示す。

#### 授業内のアクティブ・ラーニング

- ・①グループワーク、⑨質疑応答、⑩振り返りは、授業形態に関わらず、高頻度のアクティブ・ラーニングであった。
- ・④プレゼンテーションも講義の授業でも、高頻度で取り入れられていた。

#### 授業外のアクティブ・ラーニング

- ・課題(レポート以外)②個別のレポートは、後期においても授業形態に関わらず、高頻度のアクティブ・ラーニングであった。



### III. まとめ

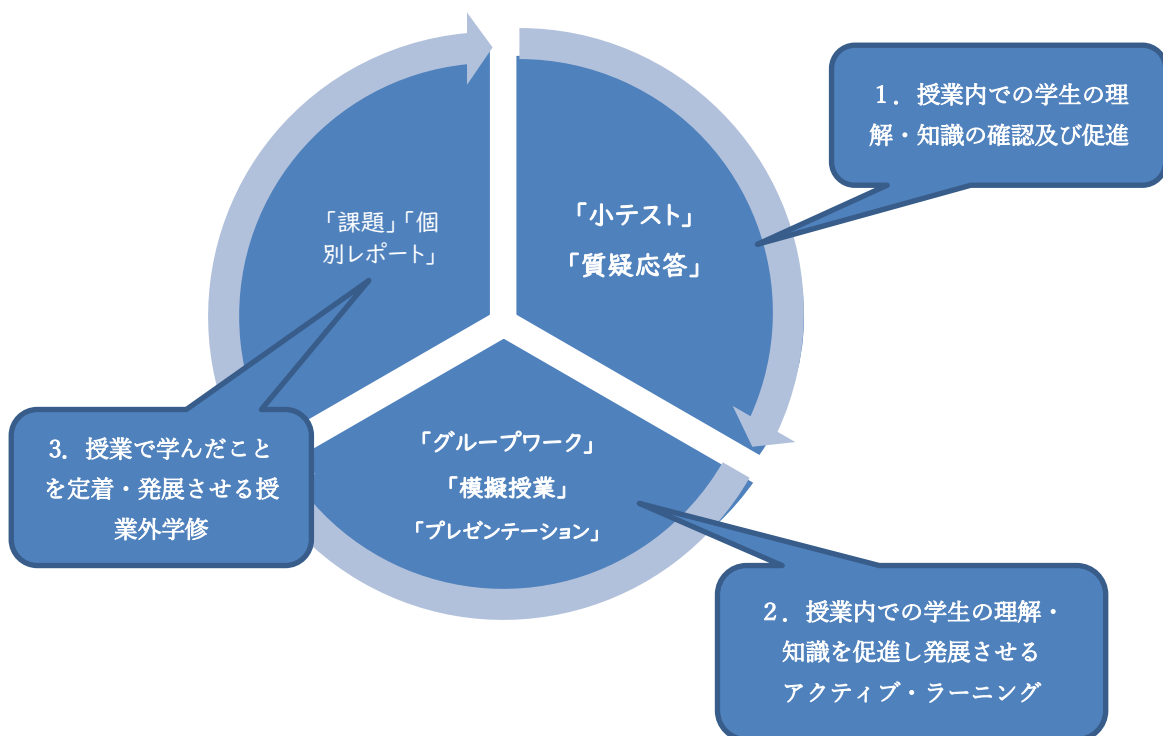
教育学部におけるアクティブ・ラーニングの現状をアンケート調査し、課題を抽出し、さらに授業改善の必要性を検討するため、平成 30 年度における専任教員が担当する講義・演習・実験等についてアクティブ・ラーニングのアンケート調査を実施し、アクティブ・ラーニング中、どの方法が、またどのような頻度で使用されているかを調査・整理した。その結果、教育学部では、講義・演習・実験等において、様々なアクティブ・ラーニングが使用・展開されていることがわかった。高頻度で使用されているアクティブ・ラーニングには「①グループワーク」「⑨質疑応答」「⑩振り返り」で、「④プレゼンテーション」も比較的高い頻度で使用されていた。また、授業外のアクティブ・ラーニングとして、「①レポート以外の課題」や「②個別レポート」は頻繁に使用されていた。今回の調査では、前期の調査よりも、後期では「⑧小テスト」の使用頻度が低かったが、時々使うという回答が 44%であったので、定期的に小テストは実施されていることが分かった。

特に、グループワーク、プレゼンテーション、質疑応答、振り返りが高頻度で使用されおり、一方通行の講義の授業が行われる回数は少なく、教員が講義等で教授・説明したことが学生にしっかりと伝わり、身に付けられているか、また理解されているかを確認しながら、講義等を進める努力をしていることを強調しておきたい。



全体的に、教育学部では、頻繁に実施する振り返りや質疑応答により、授業内で学生の理解の確認及び知識の定着を着実にを行うための努力が行われており、アクティブ・ラーニングの本来の目的が着実に実践されていることが確認された。また、講義等での学んだことをさらに確実なものとするために、講義における知識・技能を伝授するために様々アクティブ・ラーニングを駆使して行われ、ついで、授業外学修として課題が個別レポートで課されるなど、学びの好循環が確立されていることが伺えた。今後、これらの学びの好循環における課題について、検討を行う予定にしている。

### データから見る教育学部の「アクティブ・ラーニング」を活用した「学びの好循環」



本アクティブ・ラーニングに関する教育学部のアンケート調査及びその報告書は、本学 AP オフィスの元専任教員である大関智史氏が AP 事業の一環として取りまとめた資料を今回教育学部 FD 報告書として一部加筆修正し、公表するものである。